
こなた & スバルの錬金術師

棘草かがみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こなた&スバルの錬金術師

【Nコード】

N1246D

【作者名】

棘草かがみ

【あらすじ】

私達こなた、かがみ、つかさ、ゆたかはある場所に来てしまった。そこでは螺旋王が開いたバトルロワイヤルだった。それは地獄の様な所もあり、こなたは辛い思いをし、かがみにとってはつかさは死んでしまい……

ブローグxあらすじ（前書き）

基本的に悪い感想も折角貰った感想なので消さないでおきます。

それはさておき、この小説はアニメキャラ・バトルロワイアル 2ndの一部分からの分岐の小説として書く事にしました。パクリ扱いをされる覚悟で。

それでも出来るだけ自分オリジナルで書きたいので自分オリジナルで書けるようにします。

私はただの小説には興味有りませんので、以上！

プロローグ×あらすじ

私達は平和に暮らしていたが知らない所にきてしまった。

こなた、かがみ、ゆたかはバラバラに散り、いろいろな場所に来てしまった。

こういうRPGの世界には必ず魔王がつきもの。

この世界にも魔王がいる。

私達は3つの神器をもらえる。しかし、その神器は必ず役立つものとはかぎらない。

防弾チョッキやタケコプター、M4A1などの便利な物をもらえることもあれば、フォーク、水鉄砲、ブーメランなどのハズレもあるのだ。

私達のサバイバルバトルは始まった。

周りの物は全員敵。

かがみとゆたかはどこにいったかはわからない。
私はある建物からデパートに向かう事にした。

物語は今、始まる。

スバル「さあ、始まるでザマスよ」

ヒューズ「いくでガンスよ」

アルフォンス・エドワード「フンガー」

泉こなた「普通に始めようね。」

スバル&ヒューズ&アル「こなたちゃんが言うなよ!!!」

ブローグ×あらすじ（後書き）

らき すたメンバーのこなた、ゆたか以外は死ぬとされます。
それでも読みたい人はどうぞ！

第1話 禁止地域。ゆたかピンチ（前書き）

第1話は小早川ゆたか編にしました。
第2話は柊かがみ編にする予定です。

第1話 禁止地域。ゆたかピンチ

私は小早川ゆたか。陵桜学園高等部一年D組。
Dボウイと一緒になんだ。

私達は放送を聞き逃してしまったんだ。

「ど、どどどどどどうしようっ!!」

「……ゆたか、とりあえず落ち着け」

「で、でも、そんなっ、無理ですよ! だって、一つの禁止エリアが決まるのは」

「朝の七時……十分後だな」

Dボウイさんは何故か平然とした様子で左腕に嵌めた時計を見ながら答える。

何でこんなに平然としてられるのだろう。

だってもしもここが禁止エリアに設定されていたら大変な事になるはずなのに。

「俺の見立てでは、少なくとも七時の時点でここが禁止エリアになる事は無い筈だ」

「そ、それって……どういう意味ですか?」

「貴様らの中から、最も優秀な一人を選び出せ」つまり、参加者同士の戦いが奴の望み。

それに奴の佇まい、言動。自身もかなりの使い手である事は容易に想像が可能だ」

淡々とDボウイさんは続ける。わたしはそれを聞く。

戦って生き残るのが命題なら、わたしにとっては分が悪すぎる賭けだなぁなんて思いながら。

「そう考えれば、奴にとっても禁止エリアの役割は『散らばった人間を追い込む』事。

ならば『エリアに踏み込んだ人間を殺害する』結果は極力避けたと思うのが道理」

「……ッ!」

わたしはDボウイさんの考察に驚きの声を漏らした。

凄い。だってそれはあの空間に連れて来られても平静を保っていた、という証明なのだから。

わたしなんて、脅える事しか出来なかったのに。

「ただ、な。問題はこれは仮説であって、決して断定は出来ない、という事だ」

「それって……」

「このD・7エリアが禁止エリアに設定されている可能性は零では無い。」

俺も手を尽くして他の参加者を探したんだがな……結局誰とも会えずじまい……あと一分か」

その言葉につられてわたしも時計に目をやった。

短針と長針が刻むは六時五十九分。つまり注目すべきは 秒針だ。

わたし達の間を沈黙が支配した。

視線は無常にも回り続ける細長い針へと注がれる。

単純に考えてみても六十四分の一の確立。それにDボウイさんの推理を加えれば、心配する必要なんてこれっぽちも無いはずなのに。

「……十秒」

息を呑む。

9、8、7、6、5、4、3、2……。

喉がカラカラになる。

そつえば殺し合いが始まってから何も口にしていなかったっけ。

お腹減ったな。デイパックに食べ物が入ってるって言ってたけど、何があるんだろう。

イチ。

わたしは、そんな、どうでも良い事を考えて自分を誤魔化すことしか出来なかった。

ぜ……

「 爆発はしないわ、盛り上がっている所悪いのだけど」
「 ツ！？ 」「

わたし達が死角から投げ掛けられた声に背筋を震わせた瞬間、秒針は”12”の文字盤を通過していた。
七時、だ。今までの恐怖が一瞬で霧散してしまうような感じを覚え

た。

過ぎてしまえば何もかもが何てことの無い、ただの心配のし過ぎだったように思えて来る。喉元過ぎればなんとやらだ。

第2話 川におぼれた少女

真一文字に寝そべり、波に揺られるまま、かがみは水面を漂っていた。

貝を抱えるラッコのように、腹の上でひたすら大切に、妹の生首だけを抱き締めて。

やや流れの速い川をくだり、大きな橋の下をくぐって、いつしかかがみは海に流れ出ていた。

「潮風が気持ちいい……」

さざ波の音や海鳥の鳴く声が、途切れること無く鼓膜を優しく撫でる。

陸を離れるまで昂り続けていた感情も、今となっては嘘のように思えるほど穏やかだった。

かがみはつかさの首を手に取り、自分の顔と向き合うように掲げる。

水に浸しつづけたそれはくしゃくしゃにふやけ、もはや原型を留めないほどに歪んでしまっていた。

それでも、つかさと居られると思えば、そんなものは些細なことではなかった。

二人で過ごせるということが、何より大切だったのだから。

「これで、よかったんだよね。これからはずっと、つかさと……」

『バイ

』

しかし、永遠に続くと思っていた二人の時間は、あっさりと終焉を迎えることとなる。

センチメンタルな独り言を掻き消し、けたたましいブザー音が鳴り響いた。

「な、なに、なんなの!？」

耳障りな音響はかがみの体内に共鳴するように振動を伝え、緊迫感は鼓動を高鳴らせた。

戸惑うかがみを嘲笑うように、やがてブザー音はフェードアウトする。

そして一定の音量で安定すると、それに被さってまた別の音声が響いた。

『この界限は現在、進入禁止エリアと定められている。速やかに移動を開始し、当該エリア外へと退避せよ』

聞こえたのは、主催ロージエノムの声だった。二度と耳にしたくはなかったが、そんなことを考える場合ではない。

禁止エリア。聞き覚えの無い単語だったが、意味するところの見当はつく。警告に従わなければ、首輪の爆弾が作動するに違いない。

背筋に悪寒が走る。既に一度、実際にそれが破裂するのを見ているのだ。これが脅しでないことは理解済みである。

作動したとて、不死身であるかがみの首はすぐに元通りになるだろう。

それでも、首を刎ねられるという未知数の痛みを味わうことには変わりない。そんな体験は、御免被る。

「でも、でもっ。ああっ、もう、どこへ逃げろっっていうのよあ！」

されど、周囲は見渡す限りの水溜り。どちらへ泳げば禁止エリアを脱することができるのかはわからない。

たった今警告が始まったということは、エリアの端に触れてしまったに違いない。

そう考え、パニックを起こしながらも海面を右往左往してみる。

だが、警告音は一向に止まなかった。

追い討ちをかけるように、螺旋王はかがみに冷徹な最後通告を突きつける。

『残り十秒だ。急げ』

「急げっ たって……んあっ！」

緊張に身を強張らせるあまり、脚が、それもあることが両脚が、

一度に吊ってしまった。

突然の痛みに動揺し、海水を大量に飲んでしまう。下半身に力が入らず、身体が少しずつ水中へと引きずり込まれていく。

抱えていたものを無意識に手放し、腕を振り回して必死に浮き上がろうとするが、もがけばもがくほど身体は水に沈む。

「ひゃ、ごぼ、げぼっ」

鼻腔の粘膜に触れた潮水が、激痛を伴い体内へ次々と侵入する。

「8、7、6」

かがみの余命を告げるカウントダウンが開始された。しかしそれを聴く余裕すら、今のかがみには存在しない。

「5、4」

「ぼっ、あぼぼぼ」

いよいよ頭頂部まで水に浸り、天に翳した手先だけがじたばたと海面で飛沫をあげる。

「3、2」

「がぼがぼごぼ」

視界が暗くなり、朦朧としてくる。

「1」

「ごぼ……」

頭の中が真っ白になった。

「え……っ?」

コンパスを握り締めたそのとき、視界がおぼろげな白い光に包まれた。

慌てて後ずさり、謎の光源から充分に距離を取る。しかし光はすぐに弱まり、間もなくして消えた。

それだけでも驚くに値する出来事ではあったが、事態はさらなる

展開を見せる。

千里は眼を擦り、啞然とした。大口を開いたまま、光の現れ消えただけ一点を見つめる。

視線の先には、ほんの数秒前までは無かったはずの、全身ずぶ濡れで横たわる少女の姿があった…

第3話 飛びまわる甲冑（前書き）

今回は泉こなたちゃんがメインにやる話。

第3話 飛びまわる甲冑

私達は歩き続けている
近くにあるデパートへ向かって。そこに行けば沢山の人に会える
かもしれない。

ずっと私達は歩き続けている
はあはあ、さすがに疲れてきた……

「息切れてしまったっ」

アルはこなたを心配し、言った
そうするとこなたは

「わ、私は大丈夫。大丈夫なんだよ。多分……」

私は大丈夫と言った。これぐらいの疲労はそれ程わけではない。
30分ぐらい休息できれば最高かもしれない。
そこにスバルさんが尋ねた。

「こなたさんにこれを貸してあげるよ」

「スバルさん、ありがとう」

私はスバルさんから竹とんぼを貸してもらった。
竹とんぼはおもしろい。私は使った事が無いが気晴らしにな

るかもしれない。

そこにヒューズさんは怒ったようだ

「そんな事をしていたら敵に見つかってしまうかもしれないぞ」

「もしかしたら役立つじゃん。ヒューズ大佐っ」

「俺はまだ大佐じゃない。中佐だ……」

確かに、ヒューズ大佐と言うニックネームで呼ぶよ。ヒューズさんには

ちなみにスバルさんはスバルさん。アルさんにはアルと呼ぶ事にした。

私はこの竹とんぼで遊んでいるとうっかりとアルにつけてしまった。

「ごめん」

私はアルに謝った。
するとアルは

「いいよ、僕はわあああああああ」

何故か鎧のアルは飛んだ。何故飛んだのかわからない。

この竹とんぼが回っている。この竹とんぼには空を飛ぶと言う効果があるようだ…

空を飛んでいる所を敵に見られたら最悪居場所がばれてしまう。

私は少しパニックになってしまった。

第4話 つっぱしる四人

すると

「この状態からしてアル、降りて来い」

20分ぐらいかけてアルは竹とんぼを一部使いこなし、降りる事が出来た。

かなりの時間のロスになってしまい、他の参加者に居場所がばれてしまったかもしれない。

だが、空を飛ぶ竹とんぼ、どこかで見た事があるような……

「そういえば、私はテレビで空を飛ぶ竹とんぼを見た事があるんだ」

皆は聞いている。大変な情報かもしれないから

「竹とんぼを頭につけて飛ぶと言うテレビ。何のドラマかアニメかは覚えてないけど」

「あたしのあげたこの竹とんぼ、アルさんにあげるよ」

スバルさんはアルにそう言った。

しかし、アルは……

「いや、もしかしたら僕じゃ兜と体が離れるかもしれない。この竹とんぼはこなたちゃんが使つてよ……」

「わかった。私が持っている」

私達は休憩中に支給品の竹とんぼと言う当たりのアイテムを手に入れた。

力が無い私にとってかなり使える者だった。
休憩の時間は過ぎていった……

「デパート行く時競争しよう、みんなで走れば早くつくかもしれないし」

私はアル、ヒューズさん、スバルさんに淡々と言った。
まず、アルが答えた。

「いい方法だけどスバルさんやこなたちゃんがスピードとか無かったら……」

アルは私やスバルさんを心配してくれた。
私は大丈夫、運動神経はいいからと言った。
スバルさんも言う

「あたし、男っぽい所もあり、スピードも高いんだ。」

スバルさんは男っぽい所もあると言っわけか。

ヒューズさんが仕切る事になった。初めから仕切っているけど……

そう考えていると放送が始まった。

『 B - 1 D - 5 G - 6を禁止地域とする 』

D - 5は近くの場合。少しやばくなるかもしれない。
でも走り続けてデパートへ行く

私達は午前になってしまったけどデパートの入り口付近にたどり着いた。

【E - 6 / デパート入り口付近 / 1日目・午前】

【チーム：引率の軍人と子供たち】

「共通思考」

- 1・主催者の打倒。またはゲームからの脱出
- 2・首輪の解析、解除が可能な人物、技術、物を探す
- 3・互いの知り合いや、ゲームに乗っていない者を探し仲間とする
- 4・殺し合いはしない
- 5・希望を持ち続ける

首輪から、会話が盗聴されている可能性に気づきました

盗撮に関してはあくまで推測の域なので、確定ではありません

螺旋王には少なからず仲間や部下がいると考えています

それぞれの作品からの参加者の情報を共有しました

ヒューズ意外の三人は、まだ知り合いが生きて居る可能性に賭けることで希望をもっています

今のところは三人が互いの不安を保管しあうことで、崩壊するほど不安定ではありません

居場所がばれたかもしれません。

竹とんぼ（タケコプター）は最低20分は電池をしょうしました。電池の残りはこの先いくらかは皆様へ任せます。

【マース・ヒューズ@鋼の錬金術師】

「状態」：健康

「装備」：S & amp ; W M 3 8（弾数5 / 5）

「道具」：デイベック（x 2）、支給品一式（x 2）、ランタン x 1）、ロイの発火布の手袋@鋼の錬金術師、S & amp ; W M 3

8の予備弾数20発、エンフィールドNO.2（弾数5/6）、短剣×12本、制服のボタン（ロイ）、単眼鏡、水鉄砲、銀玉鉄砲（銀玉×60発）、ジャガイモカレー（中）

「思考」

基本：主催の打倒。または脱出を目指して行動。仲間を集める

1. デパートに入り、探索する予定
2. ロイ・マスタングを探す
3. 首輪や脱出に関する考察を続ける
4. 子供たちが希望を失いそうになったら、しっかりと支えてやる

【スバル・ナカジマ@魔法少女リリカルなのはStrikers】

「状態」：健康

「装備」：リボルバー・ナックル（左手）（カートリッジ：6/6）

@魔法少女リリカルなのはStrikers

道具」：デイバック、支給品一式（食料・「大量のじゃがいも、2/3」「水」）、ジャガイモカレー（特大）、予備カートリッジ（×12発）

「思考」

基本：仲間を集めて事態の解決を目指す

1. ヒューズに従って行動する
2. 六課のみんなと合流する
3. キャロもみんなもまだ生きて居ると信じよう

【アルフォンス・エルリック@鋼の錬金術師】

「状態」：健康

「装備」：なし

「道具」：デイバッグ、支給品一式

「思考」

基本：仲間を集めて事態の解決を目指す

1・ヒューズに従って行動する

2・兄やロイ・マスタングを探す

3・こなたを護る

4・あのしぶとい兄さんが、そう簡単に死ぬはずがない

アルの参戦時期はヒューズ死亡後のいずれか

【泉こなた@らき すた】

「状態」：右頬に銃創、疲労・小

「装備」：

「道具」：デイバック、支給品一式、マチェット、チェーンソー、
タケコプター、ジャガイモカレー（小）

「思考」

基本：死にたくないので助かるよう行動する。みんなと再会したい

1・ヒューズに従って行動

2・柊かがみ、柊つかさ、小早川ゆたかを探す

3・大丈夫。きっとみんな生きてるよ…

こなたの参戦時期は原作終了後

第5話 二人の訪問者

「……誰だ、お前は」

「……不寐ね」

「お互い様だ」

現れたのは青色の軍服を身に纏った女の人だった。

金色の髪と白い肌とのコントラストが眩しい。スラッとした抜群のスタイルはわたしなんかと違う、大人の雰囲気にも満ち溢れていた。

突然わたし達の前に姿を見せた　いや、”ギリギリまで見せなかった”彼女にDボウイさんは訝しげな視線を送る。

そして、わたしの身長ぐらいはありそうな巨大な斧を取り出し正眼に構えた。

ピリピリした空気が流れる。一触即発の様相。どちらも相手の腹の内を探っている。

「ちょ、おばさ　！　イテッ！！」

「……パズー君？」

「お、おねえさん！　駄目だよ、そんな喧嘩腰で……」

「隠れているように、そう言った筈よ」

「だからって……ほら、あの男の人、なんか凄そうな武器持っているし……」

わたしとDボウイさんは突然現れた男の子と女の人のやり取りをほかーんとしながら見つめていた。

何かとても失礼な呼び方が”パズー”と呼ばれた少年の口から飛び出そうとした瞬間、抜群のタイミングで炸裂した女の人のゲンコツが緊張した空気をぶち壊したと言ってもいいかもしれない。

二人のやり取りを見る限り、どうやら同行者……のようだった。

「で、どういうつもりだ、ホークアイ中尉？」

「あなた達がゲームに乗っていない事を確かめる必要があったので。」

小さな女の子と親しげに話す若い男……中々危険な構図だと思いませんか？」

”小さな”というのは一体どれくらいの年齢を意識しているのかな、

絶対下に見られているだろうなあ、そんな事をわたしは考えていた。
あの後、なんとかどちらとも警戒を解いて軽く情報交換を行う事になった。

簡易的な自己紹介は済ませてある。金髪の女の人はずさん。隣の男の子はパズー君だ。

ちらり、と視線を送るとパズー君は何を思ったのか破顔一笑。
もしかして……同じくらいの年齢だと思われるのかな？

「妙な事を言う。俺達が、か？ 馬鹿馬鹿しい。そうだろ、ゆたか？」

「え、ええ、はい。そ、そうですね……」

言われてみると……わたし、Dボウイさんに倒れ込むみたいに眠っちゃったんだよね……。

そんな少し前の事を思い出した途端、恥ずかしさでわたしの頬が少しだけ熱くなったような気がした。

Dボウイさんは天然なのか、わたしなんて眼中に無いのかまるで気にしている様子は無いけれど。

「まあ、いいでしょう。それにとりあえず、これで交換が成立しそうですし」

「……交換？」

「簡単な論理です。あなた達は放送の情報が欲しい、そして私は銃が欲しい。」

ほら、上手く釣り合いが取れていると思いませんか？」

「銃って……」

その場にいたパズー君とDボウイさんの視線がわたしに 正確に
今はわたしのデイパックの中に入っている大きな銃に注がれた。

「どういう事だ？」

「そもそも、私達は今から北へ行つて銃器を調達する予定でした。
本職が、そちらですの」

「なるほど……な。だが情報と引き換えでは、こちらの方が相当に
分が悪いと思うが？」

「ええ、それは十分に理解しています。」

それに、私もあんな心温まる場面を見せられてその銃を寄越せ、
と言うほど冷徹な訳ではありません。

報酬はDボウイさんが持つていらつしやる方の銃で結構です」

「何故、分かる？」

Dボウイさんは分かり易いくらい露骨に眉を顰めた。わたしも今の
発言には少し違和感を覚えた。
だってDボウイさんが銃を持つている事をリザさんは知らない筈な
のだから。

「言っただけです。本職がそちら、だと。」

わたしが現れた時のあなたの視線の微妙な変化、独特の筋肉の強張り、意識の分散……懐に拳銃を持っている事は容易く推測できました」

リザさんは事も無げにそう答えた。

銃を扱う事に関するスペシャリスト……そうだね、軍人さんなんだから。

ただ持っているだけでも普通の人とプロの人だと大きな違いがある、って事なのかな。

「それに 放送の情報は絶対に必要なもの。ですが……」

「知らない事を逆手に取って、嘘の情報を流す者もいる、と言いたい訳か」

「ええ。ですが、幸い私達には同行者がいる どちらも殺し合いに乗っているとは考え難いような」

Dボウイさんの視線がパズー君に、リザさんの視線がわたしへと向けられる。

積極的に人を殺そうとする、つまりヒットツカラルドさんのような

タイプの人がわたし達みたいな小さな子供を連れている訳が無い、
という論理だろうか。

確かにある程度筋が通っていて、分かり易い材料だ。

「加えて物品を介した関係は言葉だけのものよりも、中々強固だと思われませんか？」

「……了解した。持つて行け、ホークアイ中尉。残弾は三発しかないがな」

「ありがとうございます」

Dボウイさんは銃をリザさんに手渡した。

二人は同じようなタイミングで小さく溜息を吐いた。

第6話 助かった先には……

「かはっ！」

喉を逆流する異物感に苛まれ、かがみは堰きたてられるように身を起こした。

口の中は粟立った塩の味で満ちており、不快感などという言葉では表しきれない。

「がほ、げほげほ、おえっ」

さらに込み上げるものを感じ、咳き込みながら海水を勢い良く吐き出す。

見てくれに構ってなど居られない。とにかく早く異物を排出することを、体内の自浄作用が訴えた。

「よかった。やっと意識が戻ったのね」

背中を撫でる感触にはっとして、涙をぼろぼろ溢しながら声の主を見遣る。

すぐ隣に、かがみの背中へと手を伸ばす、髪を真ん中分けにした少女の姿があった。その腰には、二本の刀が提げられている。

「……いやっ」

半ば恐慌し、少女を反射的に突き飛ばした。少女は小さく呻きながら、べったりと尻餅をつく。

少女の怯んだ様子を確認し、かがみはすぐさま逆方向へと駆け出そうとする。

「あぐうっ――！」

ところが、踏み出した右脚に激痛が走り、再び地面に突っ伏してしまった。

すぐさま上体を捻って少女へ向き直り、上目遣いで様子を窺う。相手を不用意に刺激した上、逃げることもできない。絶体絶命の状況に、かがみの心臓は破裂しそうなほどに早鐘を打った。

しかし少女は得物を抜きもしなければ、殺意に顔を歪めてもいな

かった。

「まったく、不躰な人ね。あなたは学校で、人工呼吸をもらった相手には仇で返せとでも教わったの？」

突き飛ばされた少女は不機嫌に眉を顰め、スカートの泥を入念にはたきながらゆっくり立ち上がった。

人工呼吸という語を聞き、頭に疑問符が浮かぶ。そういえば、自分は海で溺れていたはずだ。

いまだ脚がいうことを聞かないことからして、あれからそう時間は経っていない。

それなのに、どういう訳か海岸も見えない森の只中に居て、さらにこの少女が自分の面倒を看ていたのだという。

「怯える必要はないわ。少なくとも、今あなたに危害を加えるつもりはないもの。」

それに考えてもごらんさないな。あなたを襲おうと思うなら、普通は目を覚ます前にやっているはずでしょう？」

「……………」

まるでこうなることが想定済みであるような口振りにやや疑念は残るものの、彼女の言い分はもつともである。

まだ安心はできないが、ひとまず敵意はないと判断しておくべきだろうか。

それに、咄嗟に逃げることの叶わぬ今、彼女にこれ以上の不信感を与えるのは危険極まる。

体格はほぼ互角。丸腰、それも動かない脚を引いて喧嘩を吹っ掛けたところで、まず勝ち目は無い。

「まあいいわ。無事だっただけでも、運が良かったんだから」
どこか意味深な言葉を吐き棄て、少女はかがみへ歩み寄る。そして右の手を、かがみの眼前へ差し出した。

一瞬びくりと身を縮こまらせるが、右手を掴んでしまえば逆に危険は少ないと思いきり、すぐに平静を取り戻す。

かがみは厚意の手を素直に受け取ると、自重の殆どを少女に支え

られながら、恐る恐る傍らの倒木に腰掛ける。

肌に貼り付く湿った衣服に不快感を覚えつつ、かがみは少女へ向けてぎこちない笑顔を見せた。

「あ……ありがとう」

「どういたしまして」

搾り出すように吐いた謝意に、少女の眉間に寄った皺はたちどころに消え去った。代わりに、人受けの良さそうな笑みが浮かぶ。

その屈託の無い立ち振る舞いを見てみると、かがみは彼女に抱いた疑念を申し訳無くすら感じ始めた。

「その、さつきは……ごめん」

「気にしないで。きちんと反省のできる人は、嫌いじゃないから」
さっぱりとした口調で、少女は応えた。どこかしら上から目線を感じるが、その気性が逆に安心感を与える。

かがみもまた、仲間内では保護者的な役回りにあることが多かったが、それとはまた違った印象である。

言うなれば、彼女のそれはリーダー的な気質で人を惹きつけるのを得意とするような感覚だった。

その安堵に包まれたためだろうか。かがみは、忘れかけていた重要なことをようやく思い出した。

つかさが、どこにもいない。

「そうだ、つかさ！　つかさは！？」

ねえ、つかさのく……い、いや、私の他に、何か流れて来なかった？」

焦燥しながらも機転をはたらかせ、軌道を修正しつつ質問を投げかける。

妹の生首を抱えていたなどと告白しては、異常者扱いされるのが関の山である。尤も、既に正常でないことは自覚しているが。

「そうね、あなたが倒れている他には何も無かったけど……」

軽く腕組みをしながら、少女は応える。

「それにしても、おかしい人ね。全身塩水まみれだったり、流れるなんて言い回しをしたり。」

まるで今し方まで、海の中にも居たみたいじゃない」

さらに首を傾げて、怪訝そうに眉間に皺を寄せた。彼女の言動に、かがみもまた顔を顰めた。

おかしいことを言うのはどちらか。かがみにとっては、水のないことのほうが余程奇怪なのだ。

海から遠く離れたこの場所に、身動きの取れないはずの自分が居ることが。

「それはこっちの台詞よ。なんで海に居たのにいきなりこんな森の中に倒れてたのか、わけわかんないわ」

「……え？」

少女は目を見開き、身を乗り出しかがみへ強い好奇の視線を寄せる。

「ねえ。その話、少し詳しく聞かせてくださる？」

愚痴まがいな言い回しで吐き捨てるように言っ たつもりの言葉。

その何気ない一言に、少女は異様なほどに関心を示していた。

第6話 助かった先には……（後書き）

ロイ・マスタングを探し、シリアスな場面に突入する予定です。

第13話では。

第13話を筆記中です。

第7話 禁止エリア、そしてつかさの死

「まずは禁止エリアについて……ですが。順番どおりで行くと七時からB - 1、九時からD - 5、十一時からG - 6。

それに首輪自体もエリアに踏み込んだ瞬間ではなく、一分後に爆発するようですね。

また、禁止エリアで爆死する事をあまり好ましくない、とも螺旋王は言っていました」

「な、なんだあ……じゃあ全然大丈夫だったんだね、Dボウイさん」

「……そうだな」

わたし達は自分達の地図にリザさんが言った禁止エリアをメモしていく。

でもDボウイさんは地図ではなく、チラチラと”パズー君の反応”を伺っていた。

なるほど、リザさんが嘘を付けば、ちゃんと放送を聞いているはずのパズー君が何らかのリアクションを示すはず、という事か。

だけど特に変化は無し。逆に彼は何故自分を見るのかと、怪訝な表情を浮かべていたくらいだ。

やっぱり、リザさんは嘘をついていない、って意味なのかな。そもそも全然信用出来そうなのにも思えるけれど。

七時からB-1。わたし達がいるD-7とは全くの別方向。

D-5は感覚的には少しだけ近いような気もするが、川を挟んだ対岸に位置する場所だ。やっぱり遠い。

Dボウイさんの仮説はやっぱり当たっていたようだ。

「あとは、そうですね。殺し合い自体はあまり捗っていない、と螺旋王は言っていました。それに……」

「小さな女の子が、螺旋の力に目覚めたのを、この目で見られたとか言っただけだったわけ？」

「ああ、そんな事も確かに。螺旋の力、と言われてもいまいちピンと来ませんが」

わたしのポケットの中で一度、コアドリルがドクンと脈打ったような錯覚を覚えた。そしてどこか暖かい。

「……相羽シンヤという男は名前を呼ばれたか？」

「お知り合いですか？ いえ、今回の放送では呼ばれていませんね」

「そいつは重畳。もっとも、奴がそう簡単にくたばる訳が無いか……」

”相羽シンヤ”その名前を口にした時のDボウイさんの表情は今まで見た事が無いくらい、怖くて恐ろしいものだった。

「それでは……他の死者も教えて貰えるか？」

「そう、ですね。死亡者は名簿の順番で呼ばれました。

順に、アニタ・キング、……エドワード、エルリック、キャロ・ル・ルシエ……」

『エドワード・エルリック』という名前を声に出した時、リザさんの顔色が一瞬曇ったように感じた。

でも、今はもう元通りの涼しげな表情に戻っている。気のせい……だったのかな？

「素晴らしいヒッツカラルド」

でも、ヒッツカラルドさんの名前が呼ばれた瞬間、わたしの意識

は急に現実に戻された。
わたし達を襲って来た魔法のような力を持っていたおじさんの名前だ。

ここまでで合計八人。それって多いのかな、少ないのかな。
産まれて初めて目の当たりにした明確な”死”
名簿の名前に斜線を引いていく行為に酷い背徳感を覚えた。

「そして、最後に 柊つかさ。……先の放送で名前を呼ばれたのは以上、九名です」

……え？

「柊……つかさ、だと」
「……知り合い、かしら。でも、ごめんなさいね、私達もグズグズしていられなくて。」

せつかく銃を貰えたと言っても、こんな怪物みたいな銃よりも軽い銃の方が好みですし。このまま北上する事にします」

「……………相当なものだぞ、それは。女の細腕で扱えるか？」

「慣れていますから」

二人が何か話をしている。多分、銃の話だ。

”でもそんなの関係ねえ”

はい、オッパッピー

あの脳味噌をグラグラ揺らすような大きな音が頭の中に呼び起こされる。

揺れる。揺れる。

外から思いつきり殴られてもこうはならないんじゃないかって思えるくらい、小刻みに意識へと攻撃を仕掛ける。

意識は朦朧として、螺旋を描く。ジリジリと焦がれるような太陽が肌を焼く感覚。

胸がギュツと締め付けられるような、心臓がリボンでグルグル巻きにされているような不思議な気分だ。

息を、吸い込む。いつもは風船のように簡単に膨らむ肺に全然空気が入って来ない。

苦しい。

酸素が足りなくて二酸化炭素が頭を一杯にして、それで

わたしの頭の中につかさおねえちゃんの笑顔がユラリと浮かんだ。
そして、一瞬の間を置いてソレは粉々に砕け散る。

爆散。ホールで見たあの男の人の死体がつかさおねえちゃん何故か重なった。

赤と何かが爆ぜる音。

飛び散る液体と思わず顔を顰めてしまうような臭い。

死んだ。つかさおねえちゃん……が？

嘘。嘘でしょ？

人の死、自体はほんの少し前に経験した。命の無くなった肉体を見たりもした。

だけど、違う。

見知らぬ人、名前と外見しか知らない人間の死と身近な人間がいなくなってしまう感覚が、こんなに別だなんて思わなかった。

ついこの間まで、笑っていた人が死んだ。消えた。殺された。

それはまるで心の中にぽっかりと空いた穴のようだ。

そうだ、空洞。ヒィツツカラルドさんの眉間に刻まれた赤くて黒い穴のような……。

直立を保てなくなった両足がガクガク震える。
まるで酔っ払いのように惑う脚。

……ダメだ……今日は、大分、調子が良いと思っていたんだけど。

「……おい、どうした？　おい、ゆたか？　おい！！」
「パズー君？」

「おばさん！！　大変だ、ゆたかが……！！」

「また、あなたはそんな」

「今はそんな事どうでもいいだろ、おばさん！！　お兄さん、大変なんだ　！！」

「おい、ゆたか、しっかりしろ、ゆたか！！」

世界が、落ちていく。

力を失ったわたしの筋肉がその働きを放棄する。

まるで腰が抜けたみたいに崩れ落ちる、その寸前をDボウイさんに受け止められた。

パズー君やリザさん、Dボウイさんがわたしの名前を呼んでいるのが分かる。

Dボウイさんの腕は暖かった。

まるで揺り籠、原始の海、羊水、どれでもいい。

凄く、心が落ち着いた。

だけど、その逆。

私のポケットに入っているアクセサリはいつの間にか冷たくなって
いた。

まるで、氷の塊のような感覚だ。

私の中の暖かな感情が全部無くなってしまった後の抜け殻　　みた
いだ。

「ゆたか！！　しっかりしろ！！」

そんな事を考えながら、私の意識は深い深い闇へと落ちて行った。

第8話　かがみんとルイズ

「……わかった！」

首を左右に傾けてばかりいるかがみを尻目に、広げた地図と睨み合いながら、少女はひとり満足げに頷いた。

そのはしやぎ様は、さながら積年の研究が実を結んだ科学者のようである。

「この会場は、東西南北の端同士が繋がっているんじゃないかしら」

それというと、RPGの世界地図なんかによくあるあれだろうか。それと現在の状況が、どう関係するというのが。

百歩譲ったとて、この悪夢と楽しいテレビゲームとの接点は、これっぽっちも見当たらないが。

「まず、あなたが流されていたのがB-1。出発点がここで、川の途中で見た大きな橋と、鳴り出した首輪の警告音がその証拠。

警告が鳴り始めてから六十秒以内にここへ来たということは、七時零分には西の端ぎりぎりに居たことになるわね」

半分ずつに分かれた地図の上でペンの頭を行ったり来たりさせながら、少女は爛々と目を輝かせている。

「私はA-1の西端に辿り着き、やはりこの森の中に居た。そして真っ直ぐ数百メートル程歩いてきて、ここであなたと遭遇。

私が移動してきた方角がほぼ真北だとすれば、全部辻褄が合うのよ」

なるほどたしかに、その理屈ならば点と点とが綺麗に線で結ばれる。その理屈が、現実に通ずる概念ならば。

どう頭を捻ったところで、到底納得はできない。非現実的にも程がある、突飛な妄想である。

「でも、そんなことができるわけ……」

「できるわけがない。でも、この際そうでも考えなければ、一から

百まで全部が有耶無耶になってしまっただけ。

街や海から森の中への唐突な場面転換は、既に起きてしまった事実。私達の常識からは、どのみち逸脱しているわ。

ならいつそ、この現象の法則性だけでも突き止めておきたいと思わない？」

「はあ……そういうもんですか」

かがみは同調とも異議ともつかない、中性的な反応を返した。

なんだか問題点を擦りかえられた感はあるが、一理ある意見な気もするからタチが悪い。

常識外れの出来事が幾度となく起こっているのは紛れもない事実であり、今更概念がどうこうと考える次元にはないのだろう。

それでも、首を縦に振る気にはなれなかった。ほんの少しでも、数奇な現実から乖離していたかったのかもしれない。

とうに実証済みであるこの不死の体を現実のものと認めることを、未だ心のどこかでは拒んでいるのと同じように。

「でも、どうやって確かめるのよ。仮に、ここから西の端に出られたって、向こうは禁止エリアで首刎ねられるわよ」

屁理屈は承知の上での反抗だった。言い切ってから、今居るエリアから逸れれば解決する話であることに思い当たるが、まあいい。

できれば、そんな証明をしたくないというのが、一番の本音であるのだから。

「そうね。実際に試してみれば、一番手っ取り早く真相が分かる。

あなた、なかなか飲み込みが早いわね。じゃあ、早速実験してみようか」

しかし反意のつもりの一言は、流れに竿をさす結果を招いてしまった様子だった。

二枚の地図へ向ける好奇心に満ちた目をそのままこちらへ向け、

少女はかがみへじわじわとにじり寄った。

「え、ちよつと……まさか」

嫌な汗が頬を伝う。思わず逃げ出したい衝動に駆られたが、この倒木の椅子から離れるのは容易ではない。

逃げなければ。でも、どうやって。堂々巡りをしているうちに、少女はかがみの胸に手を着き、思い切り突き飛ばしていた。

「げえっ!？」

掴まるべき支えなど無く、かがみの体はあっさりと後方へ投げ出される。

一瞬の浮遊感の後、かがみの視界は明転した。

光の幕が晴れたとき、そこに緑の木立は存在しなかった。

さらに地面までもが消え去り、体は冷たい水溜りに放り込まれる。

波の音。潮の香り。海鳥の声。問答無用で、そこは海だった。

『この界限は現在、進入禁止エリアと』

「やかましい!」

二度目となる警告を一蹴し、海面で必死にもがくかがみ。一分間の猶予を認識しているので、先刻ほどの焦りはない。

「ぶは、がほげほ」

とはいえ、吊ったままの脚を引きずる状態に変わりはなく、かがみの体はぐんぐん水に沈んだ。

「ぺっぺっ。ええと、木の後ろのところで、背中からワープしたから……」

脚の痛みに四苦八苦しながらも、冷静かつ迅速に思考を廻らせ。

「こっち!」

正面へ向かって水を数回掻き分けると、かがみは三度、淡い光に包まれた。

第9話 ヒューズの情報収集

私達はデパートについた。

はあはあ、ここまで来るのもなかなか辛かった。

ヒューズ「やっとデパートか、安全を確認して行こう」

そう、今の場所は何処でも殺し合いをしている可能性がある。

人の多いデパートは安全も多いかもしれないが危険もあるかもしれない。

それにロイが敵に襲われ、捕虜にされている可能性も無くはない。

私やスバルは安全を確認した。しかし、危険な物は全く無い。

こなた「さあ、いこうよ」

アル「こなたちゃん、危ないかも。注意していこう」

私達はデパートを探索した。ロイを探す為に

一秒でも早く探して生きているかどうかの確認、そして情報収集をする事。

デパートの5階を歩いていると二人の人がいた。

ヒューズ「こいつらにロイの情報を聞けば、居場所がつかめるかもしれないな。」

ヒューズはそう言った。確かに情報も手に入るかもしれない。でも、もしかしたら戦闘になってしまいかもしれない。私は戦闘では足手まとい。仲間の為にはならないだろう……

でもヒューズの大切な仲間の情報を得る為ならば、情報収集ぐらいしてもいいだろうなあと思う。

こなた「じゃあ、ヒューズが情報を聞きに行つて。私たち3人はココで待っているから」

私達は隠れやすそうな所で隠れてヒューズの行動を確認した。

ヒューズ「其処の貴方達。こんにちは」

少女「何をしにきたんですか」

知らない人「お前の目的は」

少女は長い髪を2箇所束ねていてめがねをかけている天然っぽい少女

もう一人は逆立てた金髪を持つ強そうな男のようだ……

この二人から情報を得られるかはわからないけど……

ヒューズ「この世界で人の死をどれぐらい見たとか情報を頼む」

ヒューズは単刀直入に二人の人間に話した。すると、思いもよらない情報を与えてきた。

少女「死にかけの男を見つけたから、その男にある物を与えた」

死にかけの男だって、ある物だって。その存在はなんなのか。

その死にかけの男は誰なのか。それも聞いておきたい所。

そしてその人の居場所も知っておきたい。ロイの居場所を見つける
為にも役立つ可能性もあるし

第10話 残酷なお言葉…（前書き）

お久し振りの投稿です

第10話 残酷なお言葉…

「本当にいいのかい？ 僕達もいた方がいいんじゃない」

「いや、問題ない」

「本当に……大丈夫ですか？ Dボウイさん」

「ああ」

二人はまだゆたかの状態が気になる様子だった。

だが、俺の対応を見て決心を固めたらしい。

こちらを何度も振り返りながらも元々の目的地であつた警察署の方角へと消えた。

閉じた瞳を透明な液体で濡らしたゆたかを見つめながら俺は考える。

柊つかさ。

それはゆたかが知り合いとして名前を挙げた人物の一人だ。

他にも泉こなた、柊かがみという知り合いがいるとは聞いていたが、こんなに早く死亡者が出るとは。

これではゆたかを知り合いに預ける、という方針は中々難しい事かもしれない。

「う……」

俺はふらつくを頭を抑えながら、自らの失態を呪った。
血が、足りない。

傷自体は目覚めた時には、ほぼ完治していた。背中から完全に致命傷、そう思っていたはずなのだが。

ただし、失った血液に関しては別問題だ。

血……輸血をするのならば病院に向かうべきだろうか。だが、この状態のゆたかを置いていく事など出来る訳も無い。

ひとまずは、彼女が目覚めるまで耐えるしかないのか。

「そういえば……」

俺はあの男の死体の周りに落ちていた瓶に入った石の事を思い出した。

奴のデイパックに入っていた説明書の内容から察するに、おそらく”月の石のかけら”という名の道具で間違いない筈だ。

効果は一言で言えば癒し。体力や外傷、そしておそらく精神的なダメージも含めて、僅かながら快復へと向かわせる力があるとの事だ。

その効用がどの程度のものなのかは分からない。

ただ、おそらく今、目の前で意識を失っているゆたかにとって、プラスにこそなれマイナスにはならない。

このままゆたかの状態が普通に戻れば良し。使用期限もあるようだし、無理ならば雀の涙の程の確立に賭けてみるのも悪くない。

……まあ、さすがに俺自身の血が足りないと言う物理的な問題は解決出来ないと思うが。

【D - 7 / 住宅団地 / 1日目 / 朝】

【Dボウイ@宇宙の騎士テッカマンブレード】

「状態」：左肩から背中を中心まで大きな裂傷（出血は治癒、裂傷に伴う痛みは若干残っている）、吹き飛ばされたときに全身に打撲、中度の貧血

「装備」：テッカマンアックスのテックランサー（斧） @宇宙の騎士テッカマンブレード

「道具」：支給品一式、月の石のかげら（2個）@金色のガッシュベル！！

「思考」

1：ゆたかの意識が戻るのを待つ

2：テッカマンエビル、相羽シンヤを殺す

- 3：2を果たすためなら、下記の思考を度外視する可能性あり
- 4：病院に向かい
- 5：ゆたかを知り合いか信頼できる人物にゆだねる、つもりだった
が迷い中。
- 6：ゲームに乗っている人間を殺す

「備考」

- ：殺し合いに乗っているものはラダムと同じだと結論しました
- ：テッカマンアックス撃破後、身体が蝕まれる前ぐらいを意識しました

：ヒイツカラルドの簡単に埋葬された死体の上にフィー口の帽子@バッカーノ！ が置かれています。

- ：六課メンバー、クロ達、リザの仲間達の情報を入手。
- ：紙の詰まったトランクケースはD-7に放置されたまま。

【小早川ゆたか@らき すた】

「状態」：肉体的疲労小、精神的疲労極大、絶望、失神

「装備」：COLT M16A1/M203@現実(20/20)
(0/1)、コアドリル@天元突破グレンラガン

「道具」：支給品一式、鴉羽舞衣のマフラー@舞・HiME、糸色望の旅立ちセット@さよなら絶望先生「遺書用の封筒が欠損」

M16 アサルトライフル用予備弾x20(5・56
mm NATO弾)、M203 グレネードランチャー用予備弾(榴弾x6、WP発煙弾x2、照明弾x2、催涙弾x2)

「思考」

1:???

「備考」

：コアドリルがただのアクセサリーではないということに気がつきました。

【COLT M16A1/M203@現実】

ベトナムのジャングル戦において使用されてきたM16A1 アサルトライフルにM203 グレネードランチャーを装着した画期的装備。

連射性の低さを補い、火力アップを図るために装着されたM203は40mmの各種グレネード弾を発射できる。

現在もアメリカ軍によって現役で使用されている高い能力を持った武装である。

【C-7/道路/1日目 朝】

【リザ・ホークアイ@鋼の錬金術師】

「状態」：健康

「装備」：M500ハンター（3/5）@現実、ダーツ@現実（残り23本）

「道具」：デイバッグ、支給品一式、泉そつじろうのデジタルカメ

ラ・説明書付@らき すた（ マタタビの勇姿（後ろ姿）を撮ったデータが一枚入っています）

「思考」 基本：ここから脱出する。殺し合いをするつもりはない

1：北上し、警察署で更なる銃器を調達する

2：ロイ・マスタング大佐、マース・ヒューズ中佐、エルリック兄弟^ルを探し合流する

3：パズーが仲間と合流するまでの間、彼を保護する

4：2日目の0時頃に温泉へと戻り、マタタビに協力を要請する

5：トンネルで見た化物を警戒する

6：ゆたかを心配

リザ・ホークアイの参加時期はアニメ15話辺り。彼女の時間軸では、マース・ヒューズはまだ存命しています

トンネルで出会った人物より、『線路の影をなぞる者』^{レイルトレーサー}の名前を聞きましたが、

それが名簿に記載されていないことにまだ気づいていません
デイバッグに穴が開いてしまったので、持ち運びが不便。歩行速度に影響が出ています

マタタビと情報交換をしてません。また、マタタビを合成獣の一種だと考えています

マタタビの温泉再建については、まだパズーに話していません
Dボウイとゆたかの知り合いについての情報を得ました。

【パズー@天空の城ラピュタ】

「状態」：健康だが右頬と頭頂部に鈍い痛み

「装備」：ルールブレイカー@Fate/stay night

「道具」：デイベック、支給品一式、タロットカード@金田一少年の事件簿、USBフラッシュメモリ@現実

「思考」 基本：螺旋王を倒し、みんなを救う

1：シータを探し出し合流する

2：リザ・ホークアイと同行する

3：六課メンバー、クロ達、リザの仲間を見つけたら声をかける。

4：ゆたかを心配

言峰により揺さぶりをかけられましたが、反発しています

六課メンバー、クロ達、リザの仲間達の名前、容姿をある程度覚えしました

Dボウイとゆたかの知り合いについての情報を得ました。

第11話 ロイ・マスタングを探せ!!!【前編】

ヒューズはあの2人の人間から情報を得ていた。

謎の女「その死にかけの男は貴方と同じ様な服装をしていたと思う。ボロボロな服装だったけど。」

その話でヒューズははつきりとした。

それがわが、探していたヒューズだった事。

ヒューズ「ありがとう……場所はどこか教えろっ」

そうと決まれば場所を聞いて、その場所に駆けつけるまでだ。

謎の女「教えて下さい。お願いしますとかでしょ!!でも教えてあげる。ありがたく思いなさいよ。場所は下水場です」

下水場か。F-5に位置する場所だな。結構近い場所だ。
昼のうちに探せるかどうかと言うわけだな。

ヒューズ「じゃあ、さらば。」

謎の女「フッフ……」

謎の女は笑った。俺に情報を受け渡しただけのようだけど……
何故か笑った。何かを試そうとしているような予感もする。
しかし、ロイを探さなきゃいけない。それはまずしなきゃいけない
目的だから。

ロージェノム「作戦Bを決行しよう。それはモンスターと呼ばれる物をこのロワイヤル場へばら撒く。」

ロージェノムは凄い作戦を考えていた。

ここでは殺し合いをする所だが、モンスターが出現するのはありえない話。

それを使用した理由とは

ロージェノム以外にも主催者側にいる人が何人かはいる。

その一人が考えた作戦だ。

ロージェノム「スカルファイター、ヒールスライム、ウィスプ、キラースネーク、ゴブリン、槍兵ケヤリ、ヒートフウルをばら撒く事にしよう」

そいつらはモンスターでも位は最低か2番目に低い位置をするモンスター。

しかし、それでもこの場所ではかなりの脅威になる。

泉こなたとかが戦った場合、戦闘系アニメのキャラクターとかがいなきや、勝てないほど。

強力な武器をこなたが持っていて使用できるなら倒せる可能性はある。

アイテムなしのこなたがであつたらこなたは死亡してしまうほどだろっ…

私達はまた、つつぱしている。
四人でつつぱしている。

そこに鬼火のような奴が2体と骨の戦士が1体いた。

こなた「どーせ、ゲームの雑魚キャラっぽいはず」

私は油断していた。

鬼火は炎で私を攻撃し、かなりの威力のダメージを受けた。

これだけ強い奴が口ワにいたとは……

ロイさんもやばいかもしれない！！！！

スバル「リボルバー・ナックルの必殺技で叩きつける！！！」
「ファイアパンチ」

スバルさんは拳のグローブに炎の力を宿し、骨の戦士に殴りつけた。

ヒューズ「隙を発見。戦わずに逃げるぞ。こういう敵は倒しても数
が多く、無駄だ！！！！」

アル「ヒューズさん、わかった」

こなた「じゃあ、逃げよう……」

私達は全力で逃げ、下水場付近まで逃げ切ることが出来た……

第12話 自己紹介【前編】

「おんどりやあ、いきなり何さらすんじゃ!!」

森の中へ実体化した瞬間、かがみは目と鼻の先で待ち構えていた少女に食って掛かる。

少女は動じることも無く、ロケットの打ち上げに成功したNASA研究員のような面持ちでかがみを見詰めた。

「ああ、やっぱり思ったとおりだったわ。これでひとつ、曖昧だった事象がきつちりと証明されたのね」

「はいはい、そいつはようござんしたね。お陰で私や、危うくまた溺れかけたわよ」

下目遣いで厭味たらたらに突っ掛かるかがみ。しかし少女は反省の色を示すどころか、呆れ半分に手の平を振るった。

「まあ落ち着きなさいな。そんなに鼻息を荒げて、あなたったらサルみたいよ。」

人っていうのは、常に知的好奇心を満たし続け、それにより進化をしてきた生き物なの。

物事をきつちり明確にするということは、身を張ってでも尊ぶべきもののよ」

「言わせておけばいけしゃあしゃあと……そんなら、自分の身張ればいいでしょうが!」

「あら、だって向こうは海なんでしょう? 初めから濡れねずみのあなたが行くほうが、負うべきリスクが軽く済むじゃない」

「ふざけんな!!」

いよいよ殴り掛かりたい衝動に駆られる。だが同時に、手応えのないやりとりに空しさを覚え、かがみは少女から顔を背けた。

こうしてそつぽを向き、ひとまず曲者を視界の外へ追い出すことで、場の空気を切り替える。

日常の中で身に付けた、勝ち目の無い言い争いを終結させる最善

の策であつた。

尤も、それが泣き寝入りの一種であるということも理解はしていたが。

「それにしても……」

「……なによ」

不機嫌に鼻息を吐きながら、かがみは横目で少女の方を見遣る。

何度目ともつかぬ疑問の表情を浮かべ、少女はかがみの足元を見つめていた。

「靴だけを脱いで海に、って……もしかして、あなた自殺志願者？」

「あ………」

かがみは、しばし沈黙した。そういえば、あのケースは何と表現すべきなのだろうか。

自殺がしたい訳ではなかったものの、当たらずとも遠からずのシチュエーションである。

世捨て人を気取ったという意味では、やはり自殺にあたるのだろうか。

やや思案し、溜息。考えるだけ馬鹿馬鹿しくなつて、単純に否定しておくことにした。

「そう。なら、いいのよ」

「いや、何がどういいのか意味が分からんのだが」

自己完結する少女に呆れて溜息を吐く。少女の顔にはどこか安堵の色が浮かんでいたが、特に追及する気にはなれなかった。

「ところで、自己紹介がまだだったわね。あんまり興味深い話題だったものだから、つい興奮してしまつて」

「えっ？」

少女の唐突な話題変更に、かがみは戸惑いを覚える。正確には、

自己紹介という行為に対する動揺であった。

目まぐるしく移り変わる状況に感じて、彼女が不死者であるかもしれないということを失念していた。

厭世的な気分に入り浸り、もはや他の参加者に出遭う可能性など思考の外に放り出してしまっていたらしい。

ここでひとつの分岐点が生まれる。名を名乗ることを、相手が不死者か否かの判定に用いるべきかということだ。

「私は木津千里。絶望高等学校の生徒よ。あなたは？ 珍しいデザインの制服だけど、どこの生徒なの？」

低確率ながら、疑われるリスクを負ってでも相手が不死者かどうかを確認すべきだろうか。

それとも、ここは素直に本名を名乗って、信用を崩さないべきだろうか。

第13話 ロイ・マスタングを探せ！！！！【後編】

いま、私達は下水場にいる。

ヒューズ「正しければここにロイがいる」

スバル「確かにいるといいな」

こなた「よし、出発！！！」

私は出発するべきだと思った。それは思い違いだった。
マーズ・ヒューズさんにすぐ、注意された。

ヒューズ「こういう時は音を立てて走ってはいけない！！！！
見つからないように行こう……」

スピードも結構だし、抜き足、差し足、忍び足で進んでゆく
下水場は臭いもかなり臭い。

かがみんはどうしているんだろうか。
殺気が感じた。

こなた「殺気を感じるんだけど」

スバル「殺気！？大丈夫だよ、こなたちゃん」

アル「ロイさんがいると思う。他の人のワナの可能性は無いと思う」

ここは何処だ……

ちやぴ、ぐちゃ。私たちはどんどん奥へ進んでゆく
水滴も落ちてきた。

殺気は少し治まったよう…
気のせいだったのかな。でも、まだヤバイ気がする…

ヒューズ「このマンホール。怪しいかもしれない。」

ヒューズさんはマンホールを開け、私たちは更に奥へ進んでゆく

ワアヴァー

1体のワニが襲ってきた！！！！

スバル「あたしに任せて…『フリースパンチ』」

スバルさんはグローブに冷気を集め、ワニに殴りかかった。
ワニは寒さに弱く、倒れた。

ヒューズ「トドメだ！！！！」

ヒューズはエンフィールドNO.2で1発弾を撃った！！！！

ズカン、グサツ

ワニの心臓を貫き、倒すことが出来た。

こなた「やったー」

スバル「あたしの実力よ。トドメはヒューズさんが刺したけどね」

私たちの喜びもあつたが凄く殺気が感じた。

殺気は私だけに感じたようだ……

寒い。闇の中だ。

死ぬ物か、死ぬ物か……

遠くに光を感じる……！

下水場の奥のほうであろうか……

私たちもかなりのヘトヘト。戦闘になったらやばいとは思えない

……

私たちは少し休む事になった

アル「こなた、少し錬金術のことでも教えてあげよう……」

アルが私に錬金術を覚えてくれた。

基礎中の基礎で、注意事項ぐらいだけど……

その注意事項などのおかげでアルは私に救われるのだが……

それはあとの話

私はたまたま一人の男性を見つけた。

ボロボロの服に、変な物がくっついている。
倒れている男を……

ヒューズ「ロイ……!!」

そこにいた男。それがロイ・マスタングだった……

第14話 自己紹介【後編】

「えと……り、陵桜学園、高等部……」

千里の振った話題に乗り、ひとまず時間を稼ぐかがみ。制服についての雑談でも交わしていれば、少しは尺が取れるだろう。

何せ命に関わる選択である。慎重に判断材料を並べ、じっくりと吟味したい。

「ふうん、中高一貫校というやつかしら。道理で、洒落た制服を着けていたわけね」

「そ、そうなのよ。なかなか可愛いし、気に入ってるんだ。いいでしょ？」

「……」

「……」

「……それから？」

ところが、その目論見はたったの一言で消化されてしまう。

まだ結論は出ていない。仕方なく、付属情報で茶を濁すことにする。

「さ、三年……」

「私よりひとつ年長だったの。人は見かけによらないわね」

「あはは、よく言われる。目は尖ってるくせに顔は丸っこいとか」

「……」

「……」

「……で？」

またも一言で途切れてしまう。その上、返しを考えることが想像以上に思考領域を奪い、結局何も結論は出せていない。

さすがにこれ以上主旨を逸れては、それ自体怪しまれる要素になりかねなかった。

それに、初対面の相手と共有し得る学校についての話題など、そう次々と出るものでもない。

「あの……えと」

「ああ、じれつたい。早く名前を言いなさいよ！ 私はもう、きちんと名乗ったでしょう。」

一方的に相手の事だけ知ろうだなんて、虫が良すぎないかしら。それとも、何か後ろめたいことがあるとでもいうの？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「だったら、はっきりなさい！」

癪癪を起こす千里。どうにも彼女は、堪忍袋の容量が小さいらしい。

自他共に認める短気なかがみがそう感じるほどなのだから、相当に気が短い人物なのだろう。

かがみは慌てふためきながら、ついに決断をする。

「ふ……風浦可符香」

そうして、咄嗟に浮かんだ名前を口走った。口走ってから、途方も無く自虐的な気分になる。

何故よりにもよって妹殺害の容疑者の名が出るのか。自分でも理解不能であった。

尤も、全くの適当な名前をでっちあげる訳にもいかず、参加者の中で知っている名が他に無かったのだから仕方ない。

青いアホ毛が脳裏を過つたのは、そこまで自分への言い訳を煮詰めた後のことだった。

「へえ……そう。変わった名前ね」

千里はかがみにじわりと詰め寄り、口元に微笑を浮かべる。ただし、目は笑っていない。

嫌な汗が背中を伝う。もしか、嘘をついていることがばれたのだろうか。

まさか、そんなことはないだろう。あの大人数の中から、彼女の知り合いを引き当ててしまうことなど。

そもそも、可符香は常人離れた異能を持つ殺人鬼なのだ。自分と同じ学生の身である千里に、関わりがあるはずがない。

そう、信じたかった。しかし、千里は悪戯な笑顔を見せ、きつぱりと言い放った。

「でも、それはあなたの名前じゃないわ。あなたの嘘は、私にはきつちりお見通しよん。」

何か思うところがあつてのことでしょうけど……残念だったわね、

“柊かがみさん”」

かがみは、全身から血の気の引いていくのを感じた。

「やあああああぁっ!!」

「なっ?!」

気付けば、かがみは千里に掴みかかっていた。痛む脚に鞭打ち、一気に肉薄。さらに腰の刀に伸びる手を叩き落とす。

「あ、あなた。いきなりどうしてしまったの!？」

「てええええええいっ!!」

渾身の力を込め、かがみは千里を地面へ押さえつけた。そして腹部に押し掛かって、脚での抵抗を防ぐ。

「今更しらはつくれないで。あんたも、不死者なんですよ!」

偽名が通じず、本名を見破られたということは、千里もまた、かがみと同じ不死者に違いない。

「……は？」

千里は目を丸くした。最後までシラを切るつもりらしいが、そんなことは構わない。

「そう簡単にやられてたまるか……喰われる前に、こっちが喰ってやるッ!!」

よもや、血迷っている暇はない。やられる前に、こちらから仕掛けるしか生き残る道はない。

「な、なにをするの! ちょっと、やめなさい!!」

両脚と左手とでしっかりと動きを封じてから、震える右の手をじわり、じわりと、千里の頭へと差し伸べる。

そして指先が彼女の艶やかな黒髪に触れた瞬間……視界が暗転した。

黒く長い髪が、蛇の如く四肢に纏わりつく。次いで強いガム臭がしたかと思うと、突然目の前が真つ暗になった。

「な、なんなのよ、これ……ぎゃ！」

突然の怪異現象に怯える最中、胸倉を掴まれ地面へ叩きつけられる。

堪らず這い逃れようとするも、途端セーラー服の襟を引つ掴まれ、首が絞まって身動きが取れなくなってしまう。

「ぐへえ！」

鳩尾に正拳が食い込み、黄味がかった胃液を吐き出す。飛び散った水滴が、陽光を受けてきらきらと輝いた。

千里は仰向けで悶えるかがみの体を跨ぎ、前屈してかがみの顔を覗き込んだ。

「どうしてくれるのよ、これ」

低い声でぼそりと言い放ち、千里は自らの頭を指差した。彼女の髪は、生物のように荒々しくうねり続けている。

「ど、どうって言われても……」

不死者に対する恐怖をも忘れるその剣幕に、いよいよ半べそになるかがみ。

髪が乱れたことに憤りを感じているようだが、普通そのためだけにここまで怒るものだろうか。

第一、触れただけで髪が暴走するなどと誰が予想できるというのか。

しかしそんな言い分を聞き入れてもらえるほど、事態は甘くなかったようである。

「これ、セツトし直すのにどれだけ苦労するか、あなた解っているの？」

菱形の眼をぎらつかせ、少女は恨めしそうにかがみを睨み付けた。

かがみは愕然とした。髪の毛のセットのためにこれだけの恐怖に晒されている事実には、もはや開いた口が塞がらない。

「きつちり、落し前つけさせてもらっわよ。きつちりと……」

「ひいつ……!!」

そして、かがみは地獄を見た。

第15話 ゆたかの螺旋力

DNAみたいな物が動いている。何個も何個も

ゆたか「ここは何処？」

コアドリル「キミの細胞の中だよ」

コアドリルがしゃべった。何故だろう…

ゆたか「どうしてここにいのの」

コアドリル「説明する。ゆたかは夢を見ているんだ。そして螺旋力と言う能力が覚醒しようとしているというわけ」

螺旋力？

ゆたか「螺旋力って何？」

コアドリル「説明する」

螺旋力とは、全てを象徴しているエネルギーで、DNAの螺旋の中に持っている力。回転させる際に発生するジャイロ効果、DNAの螺旋構造、天体の運動の基本である円運動、銀河の構造の一種である渦巻銀河などに代表される慣性力や遠心力に似た物。

どんな力にもできるのが特徴的。自分の思いで武器を作ること可能。

遠心加速度のように「気合」と「信念」で螺旋力を加速させ、コアドリルに込める事により無尽蔵の力を発揮するが、過度に使いすぎ

ると疲労する。螺旋力の覚醒次第では、生命の創造まで可能である。

ゆたか「凄すぎるじゃん。私、こんなに凄い物をもっていたんだ。これからも頑張ろう！！元の世界に戻るためにも」

コアドリル「間違っても、悪い使い方はしないで欲しい……、バトルロワイヤルに乗らないで欲しい……」

最後の言った事はあんまり聞こえなかった…

うう……

何処、何処、私は何処にいるの

Dボウイさんだ。何言っているの？

Dボウイ「ゆたか、調子はどうだ。」

ゆたか「痛さはなくなってきたけど体がだるい、頭が重い！！！」

傷は何故か、なくなっていた…

でも、体力がそれ程回復できなかった……

ヒートフワル「フワッ」

その時、オレンジ色の雲のようなものが私たちの所に向かってきた！！！！

ヒートフワル「フワッ！！『ナイズ・ベーキ』」

あの雲は空気上の酸素を小さな炎にし、それらで私たちを襲う！！！！

ゆたか「このパワーは……いけるよ！！！！『アクアスラッシュ』」

私、なんだか強くなったみたい！！！！

相手のナイズ・ベーキを消し去り、相手を斬りつけた
剣は私のDNAの力が作り出した物。威力はできるだけ高く設定した……

ヒートフワル「シュワッ」

ヒートフワルは破裂し、消え去った

ゆたか「今まで弱かった私だけど、これからは強くなった。病気にも負けない。悪にだって負けない！！！！」

私は確信した。悪が支配するのを防ぐ為ならどんなに残酷に殺しても良い。

悪を殺さなければ仲間が殺される。仲間を守る為にも悪を殺さなきゃいけない。

どんな事になっても、犠牲になった仲間達は勝利してよみがえらせる。友達も、ロワで知り合った良い人間も……

第16話 螺旋王の出現（前書き）

打ち切りにしようと思っています。
第21話で

第16話 螺旋王の出現

ゆたか「1kmはなれたところに誰がいるよっ」

その人の絵をわたしは描いた。その人には悪のオーラが見えたから

Dボウイ「シンヤじゃん。俺が倒そうと思っている奴じゃん」

シンヤ。それはDボウイさんの弟の相羽シンヤ。テッカマンエビルに変身するらしく、ラダムとよばれる世界を支配しようとした悪のサブリーダー。

Dボウイさんが殺そうと思っている悪。わたしの螺旋力で殺してやる。絶対殺してやる

わたしは速い乗り物を螺旋力で作り出し、Dボウイさんと一緒にシンヤの居る所へ行く…

シンヤ「久し振りだね……兄さん」

Dボウイ「お前は許さない」

Dボウイは変身した。テッカマンブレードへ……

シンヤ「化け物出現か……フッフ。その化け物を殺すまでだ」

明らかにシンヤと言う奴はDボウイさんの事を化け物呼ばわりした。わたしの怒りは頂点に達した。

ゆたか「化け物といったあなたにはさすがの私も許せない。本気で

殺しに行くしかないよう……【炎よ、巨大になれ】『ナイズ・ア・ルイフ』」

私は螺旋力に念じた。空気中の酸素を炎とし、それらを集めて巨大な火炎として相手^{シンヤ}へ向けて放った！！！！

その火炎は相手のシンヤを燃やし続ける

シンヤ「化け物に化け物って言うて何が悪い。赤毛の少女、お前の内なる力も化け物とか思えない」

シンヤは私にまでも、化け物呼ばわり、化け物扱いは酷すぎる
シンヤはブラスター化したテッカマンエビルへ変身した……

その姿は、私よりも、テッカマンブレードのDボウイよりも断然化け物だった！！！！

螺旋王「其処までだっ！！！！」

其処に現れたのは螺旋王。シンヤへ即死の一撃を放った。
シンヤはその一撃により、灰となって消え去った……

螺旋王「あと、お前ら二人を殺してやる！ウハハハハッ」

螺旋王は私とDボウイさんに襲い掛かる！！！！

ゆたか「私は螺旋王、あなたを倒します！【螺旋力を圧縮してトドメきる】『螺旋丸』」

私は螺旋力の力を手に入れた。

それを利用し、螺旋王を殺す。そうすれば、もう、私の勝利。体を健康にする事も出来る！

死んでからわかる。シンヤさんを殺したあなたを許すわけにもいかない。

螺旋王「この程度か…お前はすぐ、殺すわけにもいかないな。きっと心が崩壊し、歩く殺人兵器になる事を信じている…」

螺旋王は螺旋力を集めて、強力なワープホールをゆたかに入れる。ゆたかは口ワの他の場所に強制転換された…

螺旋王「あとはDボウイ、お前はじわじわ苦しめてやるか！」

Dボウイ「俺をやれるか。無理だろうな…」

螺旋王とDボウイの激突が始まった…

第17話 デビルマスタング覚醒。

こなた「この人がロイさん？」

ヒューズ「そうだ！」

この男がロイ・マスタングだった。

ロイ「俺に近づくな、離れろ」

ロイはもう気付いていた。意思が悪魔に支配される直前だったのだ。これ以上、ロイに構っていたら殺されるに違いないと思ったのだ。

ヒューズ「女は逃げている、私とアルがロイを看病するから！」

スバル「嫌です。あたしもこの人を助けたいです。ヒューズさんの仲間です」

ヒューズ「いや、スバルさん、私は運が悪くても貴方達だけでも死なせない為に頑張りたいのです」

こなた「そうだよ、ヒューズさんが私達を危険にさせない為に頑張ってくれているんだから…」

ヒューズ「こなたさん、貴方に短剣を5本預けておきます。貴方が死なれたら困ります。」

敵にもし、襲われた時の防衛用に持っておいてください」

私とスバルは歩いてゆく…

ヒューズさん達の期待をしてもらう為に、
ヒューズさんが死んでしまっても、生き延びると言う役目を貰ったから。

【E - 6 / デパート入り口付近 / 1日目・午前】

【チーム：こなたとスバル】

「共通思考」

- 1・主催者の打倒。またはゲームからの脱出
- 2・首輪の解析、解除が可能な人物、技術、物を探す
- 3・互いの知り合いや、ゲームに乗っていない者を探し仲間とする
- 4・殺し合いはしない
- 5・希望を持ち続ける

首輪から、会話が盗聴されている可能性に気づきました

盗撮に関してはあくまで推測の域なので、確定ではありません

螺旋王には少なからず仲間や部下がいると考えています

それぞれの作品からの参加者の情報を共有しました

こなたとスバル、まだ知り合いが生きて居る可能性に賭けることで希望をもっています

アルフォンスとマーズ・ヒューズの存在が心配であり、他の敵に見つかるのも恐れています。

【スバル・ナカジマ@魔法少女リリカルなのはStrikers】

「状態」：健康

「装備」：リボルバー・ナックル（左手）（カートリッジ：6 / 6）

@魔法少女リリカルなのはStrikers

道具」：デイベック、支給品一式（食料・「大量のじゃがいも、2 / 3」「水」）、ジャガイモカレー（特大）、予備カートリッジ（
×12発）

「思考」

基本：仲間を集めて事態の解決を目指す

- 1．こなたと一緒に行動をする
- 2．六課のみんなと合流する
- 3．キヤロもみんなもまだ生きて居ると信じよう

【泉こなた@らき すた】

「状態」：右頬に銃創、疲労・小

「装備」：

「道具」：デイベック、支給品一式、マチェット、チェーンソー、
タケコプター、短剣×5本、ジャガイモカレー（小）

「思考」

基本：死にたくないのので助かるよう行動する。みんなと再会したい

- 1．スバルと二人で行動をする

- 2．柊かがみ、柊つかさ、小早川ゆたかを探す

- 3．大丈夫。きっとみんな生きてるよ…

こなたの参戦時期は原作終了後

* * *

アル「ヒューズさん、これを見てください。大佐の身体がおかしいんです」

ヒューズが近くに帰ってきているのに気付くと、アルはすぐに声をかけた。

そこに含まれた不穏な言葉と、戸惑いを含んだ声の調子に、ヒューズは足を早め寝かされている親友の身体を覗き込む。

ヒューズ「……なんだ、これは？」

アルによつて上着とシャツを脱がされ、露出したロイの上半身。そこには大小様々な傷とは異なる奇妙な異変が起こっていた。

鈍色の鱗がロイの右肩を中心に広がり、胸と右腕を覆っていた。触れてみるとそれは金属質で、冷やりとした感触を手に返す。

ヒューズ「これは一体なんなんだアル！ 錬金術の一種か！-」

アルにはわからなかった。彼も最初は錬金術の一種かと思ったが、それを確定させることはできなかった。

身体を金属で覆い、その頑丈さや刃で以って戦いの道具にする

そういう錬金術師は少なくない。

ゆえに、最初は身体を守るためにそうしたのではないかと思った。

ロイは火を起こすことを得意としているが、

何も他の錬金術が全く使えないというわけではない。事情や必要があれば火以外の術も使うだろうと。

アル「おかしいんですこれ。金属の鱗が直接身体から生えてきていて……、つまりは融合しているんです」

言いながらアルはロイの腕に手をのばし小さな鈍色の鱗を捲ってみせ、そこが癒着していることをヒューズに見せた。

アル「それに、これも見てください……」

今度は手を胸の上へと滑らし、鱗が生えている部分とまだ生身の部分との境界を示した。

アル「……少しずつですけど、侵食しています」

二人が見ている前で生身の皮膚の一部がささくれ立ち、色を変えて一枚の鱗へと変化する。

瀕死のロイに埋め込まれたD G細胞。

それが、見守る者も。宿主さえも知らぬうちにじわりじわりとその身体を別種の物へと書き換えていた。

ヒューズ「もしかして、合体^{キメラ}生物か！」

キメラとは一つの生物と他の生物が何かで融合した生物
錬金術の世界では怪物として存在する事が多い

異変が起きた。

ロイ「ヒューズを守る。お前はてきだっ！！！」

ロイは刃とかした腕でアルを突き刺した。
それは突然の出来事だった…

アル「ぐっ……」

ロイ「まだまだあ！！！」

ロイはアルフォンスの刻印に思いっきり、殴りつけた

ガチャ…

その刻印がある鎧の部分はその威力で割れた…
アルフォンスの魂は鎧と離れ、何処かに飛び出し、途中で消え去った…

ロイ「一人殺した。ヒューズを守る！！！」

ロイはD G細胞に支配されてしまったようだ…

第18話 不死の力

「まったく、そういうことは先に言っておきなさい。いきなり馬乗りになられたって、どうしていいか困るわよ」

髪を櫛やらブラシやらで整えながら、千里は説教を垂れた。語気とは裏腹に、表情はどこか晴れやかである。

対照的に、かがみは心身ともにズタボロの状態に陥っていた。

千里の報復は執拗に続き、もはやストレスの捌け口にされたとして考えられないほどに粘着質であった。

背中に跨ってツインテールをぐいぐい引つ張られたり、未だ痺れの抜けない脚を踵で思い切り踏みつけられたり、

あらぬ方向に鼻を擦じられそうになったり、刀の柄を尻に突っ込まれたり……思い出すだけで背筋が凍り付く。

結局たつぷり十分近く蹴られ、かがみは号泣しながらひたすら許しを乞うほかなかったのである。

「次からは、きっちり確認してから行動すること。わかった？」

「はひ……ごべんなさい」

真っ赤に泣き腫らした目を擦りながら、かがみは鼻声で応える。

彼女が不死者であるというのは全くの誤解であった。

名乗った偽名を見破られたのは風浦可符香が彼女の知人、ちなみに彼女と同じ女子高生であったためで、

本名を言い当てられたのは、つかさの名を聞いて、関連のありそうな名を言っただけだったという。

まったくもって、独り相撲の蹴られ損だったという訳だ。

「それにしても……また興味深い話を聞かせてもらったわ」

そして騒動を鎮めるにあたり、不死者に関する情報を洗い浚い吐かされてしまうこととなった。

不死の酒の基本情報に始まり、アイザックというもう一人の不死者の存在まで、知っていることは全部話した。

だが、致し方なかった。こうでもしなければ、拷問は夜まで続く勢いだっただから。

「たしかに、あれだけ苛め……揉み合いになっただっていうのに、今は傷ひとつないわね」

かがみの肢体を舐めるように眺めながら、千里は唸り声を上げた。

体中に満遍なくついた痣はひとつ残らず消えており、かがみの全身は血色の良い肌色に戻っていたのだ。

転嫁されたストレスによってやつれた、幽霊のごとく蒼白な顔面を除けば。

「う、うん、そうなのよ。信用してもらえてよかったわ」

苛めてる自覚あったのかよ、と突っ込みたいところだが、ここはぐっと堪える。

できるだけ千里を刺激しないように、細心の注意を払わなければならない。

どうやら千里はかがみの話を真と受け取っているらしく、疑心を深めることだけは免れひとまず安堵する。

ところが、千里の次なる挙動はかがみの思考の斜め上に行くものであった。

「でも、不死と称するにはちょっと生温いわね。より本格的な実験をしてみましよう」

「え……………?!」

実験という語に嫌なデジャヴを感じるかがみ。刹那。ずぶり、という耳障りな音と共に、全身がどっと熱くなった。

何が起きたかわからず、かがみは首を曲げ、自分の体を眺めた。見ると、腹に棒状の何かが突き立っている。

かがみの腹を、千里の持つ刀が貫通していた。

「な……………」

事実を認識した途端、その熱さが痛みであることに気付く。だが、痛いという心の叫びすら、幾ら捻り出しても声にならない。

両手で傷口を庇うが、止め処なく溢れ出る血液は五指の間からするすると零れ落ちていく。

四肢が痺れ、急激な脱力感に襲われる。口から、ごぼ、と血の塊が飛び出した。

足ががくがく震え、もはや自分で立っていることもままならなくなる。地面に突っ伏すと、血の海が盛大に飛沫を撒き散らした。

どくどくと血は流れ、頭の中が徐々に空っぽになっていく。痛いという感覚は、既になかった。

自らの血で深紅に染まった手をただ茫然自失として見詰めながら、かがみは死んだ。

数十秒の後、かがみの体は何事も無かったかのように元の姿を取り戻していた。

腹部を襲った痛みは綺麗さっぱり消え去り、残ったのは肉を引き裂く刃の感触と、

地べたに這い蹲って情けなく悶絶していたという記憶ばかりだった。

一方の千里は、物欲しそうにかがみを見詰め、指を唇に添えて恍惚の表情を浮かべていた。

「すごい……あなた、本当に死なないのね」

「だからそうだって何度も言ってるじゃない!!　　ってかさ千里さん、これって立派な殺人っすよ、マジな話!!」

半狂乱になりながら、かがみはあらん限りの大声で千里にブーイングを浴びせた。

今にもち切れんばかり青筋を立て、目は真っ赤に充血している。

ところが千里はやはり受け合おうとせず、唇に添えた人差し指をかがみへ向けながら言った。

「あら、死なないと理解したうえで刺したんだから、殺意があったわけじゃないわ。」

第一、あなた死んでないじゃない。傷痕も残ってないし、何も気にすることはないわ。

それに、あなただって不死者を一度殺してるんでしょ。これできつちり痛み分けじゃない」

「どこがどう痛み分けなのよ……！！」

暖簾に腕押しな態度にまた腹を立てるが、震える拳をゆっくりと鎮め、さらなる罵声を浴びせることは思い止まった。

千里は不死の体を持つかがみに少なからぬ興味を示しており、また刀を抜かせる事態だけは避けたかったので。

第19話 アイザックを狙う作戦（前書き）

久しぶりにアニロワ2ndでも見に行こうと（えっ

第19話 アイザックを狙う作戦

「ふう……さて、気分……いや、あなたの誤解も晴れたことだし、そろそろ行きましようか」

「は？ 行くつて、どこへ？」

この上なく反抗的な眼つきで千里を睨み付けるかがみ。千里は再度人差し指を立て、かがみへ言い聞かせるように得意気に言った。
「決まっているでしょう。アイザック・ディアンを捜すのよ。捜し出して、喰われる前に喰ってやるの。」

さっきあなたが、私を喰おうとしたときのようにな、ね」

「あ、あれは喰われるかと思って咄嗟に……」

「問答をしている暇はないわ。こうしている間にも、状況は刻一刻動いているのよ。」

こんなところで油を売っている時間は、一秒たりともありはしないの」

言い切ると、千里はかがみの手を強引に引き寄せる。今さっきの再生により、吊った脚は元の通りに動くようになっていた。

「……離してっ！！」

だが、かがみは動こうとはしなかった。千里の手を振り解き、彼女へと背を向けた。

「どうしてしまったの、かがみさん」

「行きたくない……」

かがみは、くぐもった声で答える。

「は？ あなた、何を言つて……」

「私はもう、どこにも行きたくない！！」

「……………」

かがみの尋常でない拒絶ぶりに、さしもの千里も言葉を失った。
かがみは、震えていた。地面のただ一点を、焦点の合わない視線で見詰めている。

「私……恐いのよ……独りで歩くのが」

のりくらり、かがみは枯葉を踏んで千里から遠ざかっていく。

「だから、こうして私が一緒に行ってあげるじゃない」

「違う！ 私は、つかさが居ないと歩けない！ つかさが居なきゃ、何もできないのッ！！」

かがみはその場で座り込み、膝を抱えて小さく縮こまった。

突然訪れた心情の変化に自分でも戸惑ったが、考えてみれば当然のことだった。

死にたくないと足掻いたのも、かがみ自身の意志というよりは、単純な生存本能が働いたに過ぎない。

当面の危機を脱した今、かがみの行動の決定権は、かがみ自身の意志に戻されている。

そしてかがみは、つかさの形見すら失い、生きる糧を完全に見失っていた。

「あのままずっと、つかさと二人一緒に居られると思ってた。

なのに、私はつかさと一緒に居られる手段さえ失くしてしまった

！

私にはもう、何も残ってない。何もしたくないし、する理由も……」

「寝言は寝てから言いなさいな！」

すぐ背後からの怒声に驚き、かがみは首を捻った。次の瞬間、かがみの体は地面から無理やり引き剥がされた。

千里はかがみを抱え上げ、自分の足で直立させると、今度は両手をかがみの肩に置き、神妙な面持ちでかがみを凝視した。

「あなたの決心は、そんなに容易く投げ出してしまえる程度のものなの？」

死ねない身体になってまで全力を尽くそうと思ったのは、ただの

気まぐれ？

一度は失敗したとはいえ、あなたは妹のために何かしようと努力したんでしょう。

それなら、もう少し頑張ってみなさいよ。最後まで、自分の思う道を進むべきだわ。

妹のために。何より、あなた自身の、つかささんの姉としての誇りのために」

千里の目には、情熱の火が宿っていた。その真剣な眼差しに、かがみの鬱屈した心は強かに打ちのめされた。

「姉としての、誇り……」

かがみは、心の片隅に置き忘れたちっぽけな勇気と、海のように深い罪悪感を感じていた。

私は、何をやっていたんだろう。今、私がこのゲームから目を背けたら、つかさは二度と帰ってはこない。

つかさは、私のすべてだった。こうして失ってみて、その気持ちが揺るぎないものであることにも気付いたはずなのに。

このまま逃げ続けても、いずれ自分は死ぬ。死ねない体になったって、何もしない人間が勝者になることなんてあり得ないのだ。

それならば、居直ってでも最後まで戦い抜く道を選ぶべきではないのか。否、そもそも、他に道など無かったはずである。

つかさが生きられる唯一の可能性が、そこにあるというのなら。私はそれを、自らの手で投げ出そうとしていた。つかさがもう一

度、自分に微笑みかけてくれる未来を。

こんな風に叱咤をされなくとも、わかっていたはずなのに。諦める事など、できるはずがなかったのに。

「私……どうかしてた。ごめんね、つかさ。つかさを見殺しにするなんてこと、私にできるわけがないじゃない……」

涙が、止まらなかった。悔しくて。悲しくて。何より、自分のしてきた決断が、どうしようもなく情けなくて。

千里はかがみの肩をしっかりと握ったまま、さらに力強く訴えた。

「行きましよう。行つて、つかさんを救い出すの。あなたの……他の誰でもない、あなた自身の手で」

「うん……うん」

そして、かがみは感じていた。ああ、彼女はやはり、弱者を導くリーダーの器を持つ人間なのだと。

弱りきってしまった自分を立ち直らせるために現れた、掛け替えのない存在なのだと。

「わかってくれたなら、いいのよ……」

千里はかがみの肩から手を持ち上げると、そのままかがみの顔へとゆつくりと手を差し延べる。

しかし、その表情に先程までのリーダーの面影は無く、目はいつか見た菱形をしていた。

⌈
⋮
∧
?
⌋

そういえば、何やら背筋に悪寒がする。そう、千里の頭に触れてしまったときに感じた、あの感覚である。

しかし気付いたときには既に遅く、千里は指先でかがみの頬を撫で……思い切り抓った。

[illegible]

かがみは、重大なことを忘れていた。感動的な台詞を吐いたこの女は、どうしようもなく凶悪な粘着質暴力女、木津千里なのだ。

いくら口先で美辞麗句を並べようと、その本質が変わることはな

こうしてかがみが、御人好しにも彼女の氣遣いに幾度となく騙されてしまふのと同じように。

「わかったら、今後は手間をかけさせないでね」

「ふあい」

かがみの胸で膨らみだしたちっぽけな勇氣は、
一気に萎えてきつ
てしまった。

第19話 アイザックを狙う作戦（後書き）

21話で連載中止の予定です。

第20話 マーズ・ヒューズの最期

ロイ・マスタングはアルフォンス・エルリックを殺した。
それは恐ろしく、身が凍るようである。

ヒューズ「ロイ！ 感心してくれ！」

ヒューズは銃を突きつけてロイに言う。
だが、ロイは見向きもせずヒューズへと襲いかかってきた。

ロイ「邪魔ダ！！！」

ロイは俺へと炎を纏った刃を向け、超スピードで襲ってきた。

ヒューズ「ロイ！！！！ 俺はマーズ・ヒューズ！ 親友のヒューズ
だっ！！！！」

ロイ「マーズ・ヒューズ！？ う……嘘ダッ！！！！！！！！」

ロイは更に狂ってしまった。

そしてマーズ・ヒューズに連続で刃で斬りつけた。
それは無残な死体になるほどの威力であった。

ロイ「フフフ…… キョウカラハ俺ハ、デビルマスタングト名乗ルゾ」

ロイは変貌した。

D G細胞の力を自分で抑えられるようだけど、その力を活用し
アルフォンスの鎧を取り込んだ。

ロイ「フッフ、イズレハ、イズレハ、螺旋王モトリコム！！！！！」

【ロイ・マスタング@鋼の錬金術師】

「状態」：デビルマスタング状態、以前よりも身体能力が向上。

健康（？）：D G細胞の意識支配率：およそ5%

「装備」：アルの鎧（D G細胞寄生、黒い色）、ロイの発火布の手袋@鋼の錬金術師

「道具」：デイバッグ（×1）、支給品一式（×4）、ランタン×1、ジャガイモカレー（中）

「思考」

基本思考：優勝し、願いことをかなえるか螺旋王を吸収し、その力を得る。

そして現実世界で新世界の神となる。

1、出合ったほかの人間は殺し、その力を吸収していく

2、どんどん力を吸って、自らを螺旋王に対抗しうるだけの力を持つ生物へ『自己進化』させる。

最終話
ショッピングモール（前書き）

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめ
んなさいごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさ
い、ごめんなさいごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ご
めんなさい、ごめんなさいごめんなさい、ごめんなさい、ごめんな
さい、ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい、ごめんなさい、
ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい、ごめん
なさい、ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい、ごめんなさい、
ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい、ごめん
なさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい、
ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいごめん
なさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさ
いごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ご
めんなさい

最終話 ショッピングモール

「見た、ショッピングモールよ。やっぱり、ここはB-8で正しかったよね」

そんなこんなで、千里とかがみの数奇な二人三脚が幕を開けた。彼女の目的ははっきりとは聞いていないが、一応は同一の目的を持つ者同士、ひとまず行動を共にするのも悪い話ではない。

幾らつかさの為に奮起したとはいえ、この会場を一人歩きするとなると、やはり足が竦んでしまう。

あんな扱いをされても、一人で行動するよりはやはり心強く感じる部分はある。

尤も、攻撃性はあれど自分と同じ女子高生。大して戦力に変化はない。うまく事が運ぶのかは、かなり疑問である。

だが逆に、ほとんどん拍子で事が運んだとして。千里と二人きりになってしまったら、それこそ最悪である。

死ねない体を玩ばれ、延々と虐待され続けることになる。彼女が飢えに堪えかね、死に果てるまで。

それだけは、何としても避けなければならない。頃合を見て、彼女を排除しておかなければ。

別に彼女と友達になろうというわけではない。適当に利用して、適当に乗り捨てればいいだけの話である。

「何をやっているの、かがみさん。早くこつちへいらっしやい。急がないと、陽が暮れてしまうわよ！」

「わ、わかってるわよ。今行くー！」

しかし、やるべきことは数あれど、今は彼女の逆鱗に触れないことだけを考えていたほうが良さそうだ。

悩ましげに溜息を吐き、かがみは歩き出す。その胸に、つかさの姉としての誇りだけを抱いて。

【B - 8 / 森のはずれ / 一日目・午前】

【柊かがみ@らき すた】

「状態」：不死者、ずぶ濡れ

「装備」：なし

「道具」：なし

「思考」

基本：つかさのために、もう少し頑張ってみる

1：千里を刺激しないよう細心の注意を払いつつ同行

2：アイザック他、不死者を捜して喰う

3：頃合いを見て千里を殺す。でも報復を受ける事態は避けたいので慎重に

「備考」：第一放送を聴きましたが、つかさの名前が呼ばれたということ以外は覚えていません（禁止エリアはB - 1のみ認識）

会場端のワープを認識

【木津千里@さよなら絶望先生】

「状態」：健康

「装備」：ムラサーミヤ&コチーテ

「道具」：普通のデイパック、支給品一式（食料・「1kg」のカレー3缶）「2リットルの水3本」、狂ったコンパス、まっぴたつの地図）

「思考」

基本：きつちりと実験を終了させる

1：ショッピングモールへ向かう

2：アイザックを捜し出し、かがみに喰わせる

る

3：残ったかがみをきっちり片付ける方法を探す

4：糸色望先生と出会ったら、彼との関係もきっちりとする

5：螺旋王の運営方針に強いフラストレーションを感じてい

「備考」：死亡者を聞き逃した

会場端のワープを認識

不死者について説明書程度の知識を得た

つかさが生存者と誤解

「補足」：千里のコンパスは、ワープを利用した際の磁気の異常により故障しました

つかさの首（首輪なし）は場外に流れ去りました

最終話 ショッピングモール（後書き）

この小説はここで打ち切りとなりました。しかし、修正はしていきたいと思います。

この小説は元々アニロワ2で投稿したが通らなかった物をまず書きたいと思ったのです。あと、こなたが死亡したのも悔しかったのでこなたが死なない形に変更して。

でも、盗作は絶対いけないことなので深く反省します。

途中打ち切りの事もあるし、ごめんなさいを無限に言う形で終わると言う事で。

世の中の知っている全てを登場させたパロロワ。名前はオールロワイヤル（仮）をいつか建てたいと思う。

って同じ名前の物がもう建てられているんだって!?

じゃあ、そのアイデアはその人に任せます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1246d/>

こなた&スバルの錬金術師

2010年10月9日14時21分発行